

「いま、丁度午睡をしてゐた処で……」といふ先生の後に蹤いて私は座敷へ通つた。そして改めて初対面の挨拶をして持参した原稿を先生の前に差出した。

先生は直ぐにそれをきちんと坐つた膝の上で閲覽し始めた。

その前で私は、先生に就ての私の概念を繰返しつゝ、藍氣の濃い浴衣の幅広い先生の肩を眺めたり、床の間に順よく並ぶ書類やその傍にある小さな仏龕に見入つたり、柱懸けの省亭画伯の色紙の絵を見ては、は、あと思つたり、座敷の一方に並ぶ杉の研出しの本箱を見やつたり、更に庭の芙蓉の下にあつた竹の涼み台の辺に、夏の真昼の閑寂さを思つて見たりしてゐると、自然先生の俳境といふやうなものが自づと感じられたが、やがてその影深い落着きある座敷にかしこまる自分の、後日先生から鶏冠みたいだと揶揄された処の、そろ／＼伸ばし始めてゐた頭髪に思ひ及ぶと、我ながら周囲に対して不調和極まる客振りに汗を覚えて、またしても不時の闖入者といふ念が深かつた。一つには、原稿の出来栄についての不安も勿論あつた。

「大変面白い……結構ですとも、どうもお世話でした」、読み終ると、先生はさう言つて、また一つ不細工に頭を下げた私の眼の前で、紙綴を一本取出すと、その原稿の片隅を器用にとじ更に紙綴の端をきちんと切つて床の間へ置いた。そこに、日頃から想像してゐた先生の性格の片鱗を見たやうな気がして、私は成る程と思つた。

原稿の用件が無事に済むと、先生は、前日の先生の選に入つた私の夕立の句の批評をして下さつた。処が私は漫然と作つた

ものだったが、先生の批評で自分も気付かなかつたその句の規ひ処といふやうなものが初めて判然と自分に領けたには、聴いてゐながら私は一寸間が悪かつた。初めて、教へられるといふ気持でしみ／＼頭を下げた。やがて、私の郷里の話なども出て私は問はれるまゝに国の茶摘の話などをした。初めて、この秋から創刊される曲水の話をも先生から聴いた。すると、私は急に東京を離れるのが寂しかつた。帰り際になつて、私は幾度も躊躇してゐた風呂敷包を開いて、思ひきつて、持参した扇子を先生の前へ出した。その頃まだ俳人の手蹟といふやうなものといつては何も持つてゐなかつた私は、事に依ると当分離れなければならぬ東京の思ひ出としても、先生にその扇子へ句を書いて頂き、それを記念に京都へ旅立ちたい心だつた。で、氣遅れながら、たう／＼先生へ願ひでた。

「もし願へましたなら、日輪を送りて月の牡丹かな。あれを書いて頂きたいと思ひます」

私は是非それが欲しかつたので、さう願つた。

すると、先生は、一寸私が驚かされたくらゐ早速に承知して下さいと、其の場で墨をすり、私の白扇は見る間に私の希望通りのものになつた。私の心がどんなにその前で雀躍したか。が、実は、史耕氏の銀短冊が羨ましくてならない心から、別に、銀短冊や其他二三葉途中で買って来た短冊が、まだ私の風呂敷包の中には細長く入つてゐたのだが、最初の扇子をあまり氣持よく諾いて下さつたので、欲しくてたまらなかつた私も、どうしても短冊の方へもとはお願ひ出来なくなつてゐた。未だに私は、